

氏 名	岸 佑		
学 位 の 種 類	博 士 (学術)		
学 位 記 番 号	甲 第 1 7 5 号		
学位授与年月日	2 0 1 4 年 3 月 2 6 日		
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当		
学 位 論 文 題 目	「貫戦」期日本におけるモダニズム建築の言説・表象・実践 —近代性による「日本的なもの」の構築— (Building a Modern Identity: Architectural Debates in "Trans-war" Japan)		
論 文 審 査 委 員	主 査	献学60周年 記念教授	M. ウィリアム スティール
	副 査	准教授	倉 方 駿 介 (大阪市立大学)
	副 査	教 授	高 澤 紀 恵
	副 査	教 授	リチャード L. ウィルソン
	副 査	教 授	岩 切 正一郎

論文内容の要旨

本論文は、1920年代末から1940年代にかけて、日本のモダニズム建築のなかで「日本的なもの」がどのように議論されたのか、について研究した論文である。

この時期の建築家たちは、建築における「日本的なもの」について多くのことを語っているが、本論文は建築家・建築学者の岸田日出刀に着目し、その著作や論文に現れた言説を通して、岸田が建築における「日本的なもの」をどのように考えていたのかを論じた。本論文では、建築における「日本的なもの」の議論を通して、岸田がモダニズム建築を日本向けにローカライズするために、プロデューサー的役割を担っていたと考えた。そして本論文は、そのことを言説・表象・実践という三つの観点からそれぞれ論じた。

「日本的なもの」への問いは、近代になって戦時期に顕現したナショナリズムと密接な関係があるとしばしば考えられるが、同時に自己規定をめぐる文化的認識への問いであるがゆえに、戦時や終戦をまたいで連続している点もある。本論文では、「貫戦」期ということばを用いることによって、建築における「日本的なもの」の戦時・戦後の連続性と非連続性を捉えようと試みた。

論文の構成は大きく二つに分けられる。

第1章と第2章では、岸田自身の言説および岸田が提示した視覚表象の問題を論じた。

第1章では、モダニズム建築と歴史の関係について論じた。日本建築における直線と曲線の関係に着目し、岸田日出刀の日本趣味建築批判について論じたのち、合理主義的な伝統理解の限界を論じた。第2章では、岸田の著作『過去の構成』に着目し、その視覚表現とテキストの関係について論じた。この著作は、日本建築にあるさまざまな幾何学的抽象美（コンポジション）を視覚的に提示するが、それは恣意的なものではなく、カメラの機械性とレンズの客観性から導かれた「真実」の視覚によってもたらされたものと考えられていた。このような理解は、当時のモダニズムの写真運動とも共通する。その一方で、『過去の構成』における視覚的プレゼンテーションを通して提示されたのは、そのような日本建築が共時的にもつような、不変的特徴だった。

第3章では、1930年代後半の建築界の動向をとりあげ、この時期に岸田のさまざまな活動が挫折する一方で、新しい理論的方向が見出されていたことを論じた。まず1940年の東京オリンピックのために結成された日本工作文化連盟の活動を取りあげた。東京オリンピック返上決定後に発行された機関誌『現代建築』は、モダニズム建築についての理論的言説を生産し、モダニズム建築の理念のひとつである合理主義の乗り越えを試みた。1939年の忠霊塔の設計競技と1930年代後半の熱河遺跡ブームは、「日本的なもの」という観点から慰霊と記念碑性をどのように表現するかを建築的な課題として提示した。またこの時期は、「日本的なもの」が再規定された時期でもあり、それまでのアジアの博物館としての日本というものから、日本とそれ以外を区別して、いわば中国的なものを排除したものが「日本的なもの」とみなされるようになった。岸田は、東京オリンピックの競技場設計や、忠霊塔の設計競技のデザイン指針をめぐって挫折し、これ以降彼はモダニズム建築をプロデュースする側にまわる。本論文では、浜口隆一と丹下健三を取りあげた。

第4章と第5章は、浜口隆一の終戦前後の活動と戦後の広島平和公園に注目し、いわばプロデューサーとしての岸田の存在を論じた。第4章では、建築評論家の浜口隆一が1944年に発表した「日本国民建築様式の問題」という文章と、1946年に発表した『ヒューマニズムの建築』について、それぞれ内容を確認し、その論理展開を比較した。敗戦を挟んだこのふたつの文章は、石と木を建築の本質を表す比喻とみなして対比的に捉え、日本の建築がどうあるべきかを論じている点で共通しているが、敗戦による差異も認められる。この変化には、終戦直後の状況が影響を与えていると考えられますが、戦時と戦後で論理展開が共通している点に、浜口の「貫戦」的議論をみることができるだろう。第5章では、広島の平和記念公園をとおして、戦時と戦後の連続性を捉えた。爆心地周辺を公園にしようとする平和記念公園の計画は、丹下健三の応募案が選ばれたが、これは1942年に実施された大東亜記念営造計画の丹下健三案と平面構成が共通している。しかし平和公園の設計案は、原爆ドームをシンボルとして発見し、戦争と死者をめぐる政治的に繊細な問題を、空間構成によって見事に表現した点で優れていたといえるだろう。その一方で、戦後復興事業の一部として行われた公園の建設はさまざまな困難の連続であり、平和都市を建設するために社会的弱者が住む場所を奪われていくという、ある種のねじれも存在していた。第6章は、各章の要約を掲載し、今後の課題と展望を加え、まとめとした。

論文審査結果の要旨

2014年1月14日、M.ウィリアム・スティール、高澤紀恵、リチャード・ウィルソン、岩切正一郎、倉方俊輔の各教授からなる博士論文審査委員会の審査が開かれた。審査では、冒頭に岸氏から論文について概要的な説明が行われた後、審査委員会から個別に質疑応答が行われた。

審査委員会は、まず本論文が、建築家や建築物ではなく思想、イデオロギーあるいは論争という観点から日本近代建築史研究にアプローチをしたことを評価した。本論文の分析は、1930年代から1940年代にかけての「日本的なもの」に関する議論を、モダニティと関連づけて論じる一方で、ナショナリズムの台頭という面から論じたもので、その両面への注目に独自性がある。さらに審査委員会は、東京帝国大学教授で建築学を講じていた岸田日出刀に、本論文が注目した点の評価した。岸田日出刀は、日本近代建築史上で、丹下健三のような学生を育てたことで知られている。岸田の日本近代建築史への貢献は、形態や機能、様式あるいは建築材料をめぐる建築論的議論への介入にとどまらず、モダニティと「日本的なもの」の同一視を理論的に論じた点にあった。このように審査委員会は岸氏の論文を評価した上で、審査は個別の質疑応答に移った。

スティール教授は、岸田日出刀の日本近代建築史における位置づけと役割について尋ねた。それに対して岸氏は、岸田が日本近代建築史の位置づけが限定的なものであったことを述べた後、モダニズム建築の受容と定着を考える上で、特にモダニズム建築が制度的に定着する上で重要な人物であった、と応答した。次にスティール教授は、論文の比較文化的可能性について言及した。スティール教授の質問は、本論文のような「日本的なもの」に建築からアプローチする方法は、例えば「アメリカ的なもの」や「ドイツ的なもの」にも有効であるのかというもので、それに対して岸氏は、「日本的なもの」とモダニズム建築の関係は、比較的現在から近い時期に創られたという点で国民性のような議論と共通したものがあるが、伝統と近代のように対立するものではなく、伝統が近代的であるとされたことが特徴的であった、と述べた。

岩切教授は、さらにモダニティと「日本的なもの」との関係についての説明を求め、それに対して岸氏はモダニティが「日本的なもの」を発見したと返答した。つまり、建築における「日本的なもの」とは、20世紀になってから登場した欧米における最先端の建築表現が登場してから、発見されたものである。岸田は、日本建築が直線的であること、あるいは在来工法が軸組構造であることなどに注目し、これらの特徴がモダニズム建築の建築的特徴と一致していると論じているが、日本建築がモダニズム的であるのではなく、むしろモダニズム建築によって「日本的なもの」が発見されたと考えるべきだ、と述べた。また岩切教授は、論文の最後に1955年竣工の広島平和公園をとりあげていることについて説明を求め、「貫戦」期の議論の最後に、例えば1964年の東京オリンピックではなく広島平

和公園を選んだ理由の説明を求め、広島平和公園と「日本的なもの」との関連性について質問した。岸氏は、竣工時の広島ピースセンターは、ピロティやプロポーシオンが日本建築を思わせると考えられており、モダニズム建築の日本的表現だと考えられていたと回答した上で、しかし定稿における論述がやや足りなかったことを認め、加筆修正の機会があれば補いたいと述べた。また、「貫戦期」という時代区分は、広島平和公園をメルクマールとして終わったということではなく、1960年代に徐々に変容していったと考えているので、それについては今後の研究課題としたいと述べた。

高澤教授は、本論文における「貫戦」期という時期区分の有効性について質問し、第二次世界大戦の終結が日本の建築や建築家に与えた影響について尋ねた。岸氏は、定稿では思想や理論に注目したために戦時と戦後の連続性を強調したものの、終戦や戦後復興が建築家に与えた思想的な影響は、定稿では扱うことのできなかった1950年代後半以降に登場すると考えているために今後の課題である、と述べた。続いて高澤教授は、岸田のモダニティについて説明を求め、岸田が試みたものは、普遍主義と排外主義とを結びつけようとした特殊な思想だったのかと質問した。それに対して岸氏は、次のように述べた。確かにモダニズムの建築運動はグローバルで同時代的な文化動向であり、一方で「日本的なもの」という意識は個別的であり、それが結びつくというのは我々からすれば論理的な飛躍があるように思われるが、岸田自身はそれを飛躍ではないと考えていたはずである。

ウィルソン教授は、モダニティがローカルにもグローバルにもなりうるという主張に同意した上で、岸氏の論述が、建築物ではなく言説や思想といった論争に注目するアプローチの有効性を認めた上で、しかし全体を貫く中心的な軸が見えにくいことを指摘して、本論文の中心軸を確認した。岸氏は、それは「日本的なもの」である、と述べた。岸氏は続けて、確かに章によってはそれが議論の中心にあることがわかりにくい章もあるが、近代の日本建築とは何か、あるいは日本における近代建築とは何か、をもっとも議論できる主題が「日本的なもの」であった、と返答した。またウィルソン教授は、岸田日出刀とル・コルビュジエとの繋がりはどうであったのか、と質問した。岸氏は、ル・コルビュジエと岸田との関係は限定的なものであっただろうと述べ、岸田にとってコルビュジエはモダニズム建築の思想を代表する建築家であったが、その理解は合理主義やピュリスムといった初期のル・コルビュジエを中心とした理解であったように思う、と述べた。

最後に倉方教授が、これまでの質疑応答を踏まえながら、本論文の研究が膨大な先行研究と先行文献を踏まえた上で記述であると述べて、本論文の価値を認めた上で、戦前と戦後における日本の自己意識の変遷と「日本的なもの」の関係について質問をし、本論文における議論の中心がやや曖昧であることを指摘した。岸氏はそれに対して、次のように返答した。定稿における議論の中心は、「日本的なもの」という主題である。しかし、「貫戦期」という時期区分の設定や、岸田への注目、あるいは「計画という思想」とでも呼べる思想への注目があるために、記述にわかりにくい部分が生まれてしまった。だが、モダニズム建築が「日本的なもの」という理論的なツールを通してローカライズされ、徐々に変容していく複雑な過程をみるために、これらの記述は必要だったと考えている、と述べた。

続けて倉方教授は、岸田日出刀についての説明を求め、日本近代建築史上における岸田の重要性や岸田の思想的独自性とは、東京帝国大学教授という地位に由来するものと考えられるか、と質問した。それに対して岸氏は、岸田の重要性は、モダニズム建築を日本に定着させるためのプロデューサー的役割を担った点にあると述べた。しかし岸田は、ある種の知的「凡庸さ」があり、それが日本近代建築史における岸田の役割を見え難くしていることも事実である。一方で、岸田は、東京帝国大学という制度や教育を通してモダニズム建築を受容する回路を作ったという点で、注目すべきものがある。戦後の岸田の活動も含めれば、さらに述べることも多くなるが、それは今後の課題である、と述べた。そして倉方氏は、1930年代後半に大陸や南方の経験によって「日本的なもの」という主題が再措定されたという主張の論理展開が不十分であることを指摘した上で、アジアや大陸の経験という問題が、戦後の展開のなかで忘却された重要な主題であり、しかしそれこそが、浜口や丹下といったモダニズムの新たな展開を創造するモメントになる一方で、岸田の限界はそこへ投企できなかったことだと思う、と述べた。そして、「日本的なもの」とアジアの経験という主題は、今こそ改めて問題にされるべきものであり、その時にかつて同じ主題をめぐってどのような議論が行われたのかを整理することは必要であろう、と評価した。

審査委員会は、いくつかの点で岸氏の論文における論述の不足を指摘した上で、この論文が日本近代建築についての議論のみならず、近代世界における日本という場をめぐる広汎な議論にも光をあてる意欲的な研究のひとつであることを認めた。特に、第二次世界大戦の前後の連続性をみとめる議論は価値あるものであり、さらに「日本」の自己意識をめぐる議論の射程は現在においても有効である。審査委員会は、岸氏の論文を出版するに際して加筆と修正が必要であるとし、岸氏も出版のような加筆修正の機会が与えられるならば、審査委員会から与えられたコメントを反映すると約束した。

審査委員会は国際基督教大学教育研究棟 257 号室において、2014 年 1 月 14 日 10 時 10 分から 12 時 40 分まで最終口述試問を実施し、引き続き審査委員による最終判定を行った。その結果、提出論文は博士論文に値するに十分な内容を持ち、また学位申請者が自立的で高度な研究能力を有することを認めて、全員一致で本論文を博士論文として合格と判定した。